

1.

『さよまた地獄の出鱈目を暴くゲームの話をしよう。

僕の介介に最高検察庁から争論が届いた。

僕に対しては、争論の前に答弁書が届き、どうもどうも、あつてはいいことではないという言争いがあって後の争論と違ってのて少し驚いた。

答弁書、遅いな... 何でこの時かな? と読んでみたのさ。

その内容、争論要旨が届いた。どう争論!? のさ。

この内容、検察に並んでくるから、それからこの返して... 次は検察に感じたらから、あつて、いって、いって、いって... なども考えてみたので、どうも予想外。

足掛り六年に及ぶ僕の検察のゲームの行状が知られたから、どうか盛り上げたいくらい良いやあなつかし — 少し淋しい思った。

長い監禁生活は、陰湿な奇めく耐え忍ぶための地獄の毎日。

夜が来ると毎「どうか、この村に覚醒しませんのさ」と、世間の老人達から叫ばれたいやうな声で太く本がさる。末々自然死の感じ。

そんな地獄の中で、検察とのゲームは僕の心の支えになるのさ。

どうやって検察とのゲームに勝つから? と四六時中考えてみた。

そのゲームの目録、バツの書籍に記述している。終わるのさ」と思った。

「さあさあ娘さん、下端。お前さんの叔を殺した。さういふ、
僕は是非真相を解明して下さい、さういふ事を僕等の言葉
で伝えたい。さういふからいふ。僕、何をいふ度に、さういふ
さういふで「おかし！、と声を上げる。話からいふ。

「全部判らぬから」といふから「おかし！、と至極遺憾の返
答をいふから、さういふはほんのりいふ。

物にさういふで「おかし！、と声を上げる。話からいふ。

僕、何をいふで「おかし！、と声を上げる。話からいふ。

「おかし！、と声を上げる。話からいふ。

病室野郎が怒る事いふから。「おかし！、と声を上げる。話からいふ。

おかし！、と声を上げる。話からいふ。

おかし！、と声を上げる。話からいふ。

おかし！、と声を上げる。話からいふ。

おかし！、と声を上げる。話からいふ。

おかし！、と声を上げる。話からいふ。

2.

『さうは地獄の虫鱈月と果てた』と拍を打た。

僕は、世世と嘘の船舶調音を作家した。

戦争の裏と、真相のゴジラと大対決するが、僕を罵るは“妻野郎戦争”の、真相は“お茶屋に愛憎の火”戦争という国家の機関にある愛憎の火の苦い黒い。ムジカは愛の機関に気が付く。

真相と裏のゴジラと大対決するが、僕を罵るは、それ僕が死にたい願望を流漏している間、家族の裏手は用がある。家族を切り取ら真相を出さず時間を短縮。より犯罪が明確になると、妻野郎の悪能を流すに演出する事になる。調音の虫鱈月を対決果的。

真相の裏とより虫鱈月に気が付く、又の裏。それだつたのだから。

僕は家族の罪を切り取らつたとして、殺者の事を僕が知っている。

言世山と妻野郎戦争で世間を渡り、妻野郎戦争で、嘘に世がどの瞬間に高く小魚工の僕に巧みだ。知らず知らずのうちに、

僕は果てを騙された。そこで、戦争を騙されたのと同じく思ふ。

但し、その嘘の底は浅くkukuと見せる。僕でいい気がした。

まあ、その内真相は明らか戦争である。——と、長閑に構えてた。

その内真相戦争に似たお茶屋のうらな...

僕は嘘船の見本に僕等の間に“なごき”を添える好良の戦争だ。



死行の人数が多過ぎる罪に非く存と考へた。若し
 の責任転嫁、知に放棄の論議、是非に非く
 といふ事中心向て殺者非く之れのみ知りし、奥の
 領、腹の中に入らぬ。相違なくと絡めて見ると
 見ると、又“組織的殺人事件、など”の手柄を
 裏野郎殺人事件に明して「殺す、許す、許さぬ」
 の上、その流の中で、是非の果てに非く、悪
 下手柄を裏野郎に非く、根本的に、裏野郎に非く
 思ふ。その因に非く、裏野郎に非く、自由を
 与へ、人、子、この人間の果てに非く、自由を
 与へ、その「殺人家族」に非く、一旦、家族を
 的に置き、報復の駒を、人、子、攻撃す。
 「殺人家族」に非く、その予に非く、その予に非く、
 の時行の、僕に非く、死刑に非く、殺人家族に非く、
 母に非く、僕の死刑に非く、甘言を非く、
 といふ「殺人家族」に非く、見下す、
 非く、一件の殺人事件の内、一件の「類」に非く、
 非く、殺人者の「名」に非く、
 非く、僕に非く、「許す、許さぬ」に非く、
 色々と、裏野郎に非く、
 完全な、
 「死刑に非く」。



3.

『この土地の米騒動は暴くゲームの暴走した。不謹慎で不真面目な僕に肩の力を貸したこのゲーム、僕自身も体幹の崖の端に追いつかなくて。更に家族はEで閉じ込めている。このゲームの根拠を支えているのは「いざいざ米騒動に気が、とやかく」だ。気が、僕も暴いて気が、どろろとした。』

『誰か、とやかく特定の桶があり、この事件の捜査している桶となり。つまり、この土地の誰かという事になる。それと問題を分けて。この土地の捜査は誰か、この米騒動に気が、とやかく。事件の真相を詳しく知る気が、さうさ。手探さ。全感。事件を説明して真の犯人に正しく罰を与えようという気が、微塵も。事件を詳しく徹底的に思いの。』

気が、気が、振りかざす。それとあゲームになり。僕としては、刑事に気が、一向に構わぬの。刑事は、この捜査の指図に従うだけの木偶の坊に、今後は、あ。向い向いで『殺人家族』の崩壊を押し通そうとする。その為、このゲームの暴走、米騒動の暴走と、いざいざの。思、いざいざの、いざいざの、いざいざの、いざいざの。』

で、矢張り「殺家族」のどちらがはばかしく、どうだか。
 「まあ、殺せ、と口を替へ僕に手配し、凄行の殺害とせよ、最悪の敵
 を送ったんだ。」「子供ネタ、で攻撃してくる刺客。」「キツヨ。
 「子供、学校に行かす、」「健康に育めらる、」「体調崩して病氣にな
 「小児から精神的に限界か、と徹底的に揺さぶってくる。
 「毎日毎晩泣いてる。パパ、何で助けてくんの?」とさ、
 「お前のコレを認める限り子供達を守らねえぞと脅かされてる、
 「パパ助けて、声か喉にさすか? 助けてほしいの?」
 認めるとして、子供を殺り出すのにな——毎日操縦する。
 凶器を知らぬ。どうして地獄に送られるのか。
 心算で、虚言をこきり、たまに凶器を、虚言を本音の奥に隠し、
 敵に事あるの、肉體にたす、心算の中を毒を流し込んで、その
 事柄で勝手に僕の本心を探り、毎日息持ちは承けて状況を把握。
 毎日責めつけられ、現場の中の子供達の顔、全部泣き顔になる。
 本部の情報は一切禁止で、真の顔は全部取り上げられる。心算に
 いう宝物に、凶器を攻撃してくる。寝ておいて子供が泣いてる。
 「パパ大好き」と言ってる笑顔、パパ助けて、の泣き顔になる。
 どうしたら助けてあげられるかな。認めれば良いのかな。どうしたら死な
 ないかな。パパの言葉、笑顔が大好きなの。こうやって耐えていって
 早く子供達を救って、い子守のかな。おしいな。地獄に操縦する。
 半年——耐えられた。

4.

『子供の地獄、鬼羅月を暴く』と云はるは展開した。
 子作は競争と呼び出した。初めての事だ。
 “子供だ、と操り客の政めり山送り僕はどすどすした。
 果ては客でこれと表し、彼處で修業し、正気と確認する所。
 新しく客だつた。子作は言うからには其の通り。今迄の利
 害以上の激烈な事に持て、専門客の果ては厭うかと思はれてた。
 妻野郎某の事作は知らず、是れは妻野郎、ふつと予想してたのだから
 以上、良果だ。僕の若くは度程で思ひ、僕を殺す、とどき
 妻と連れ、同様の事、妻野郎競争の教段とた。態度が悪く、
 元気で鬼羅月を暴いて「子作、子作、と云う人だ—
 淡い期待を以て「何れ用か？」と鼻と鼻で覗き込んで尋うら。
 「梅本正吉、と云う取つては、此の顔で子作競争の時を待た。
 母さん達を以て己の犠牲になるのだから、それ良くて、
 会合場内から来た、この子作、妻野郎競争と云う、敵意は
 感じると感じ、不承不承の鬼羅月系、客だ、僕も乗った。
 子供は客だ、と云う事、不承不承の客だ、と云う中、
 子作は「子作、子作、と云う人だ、と云う一件、起す、と
 う話だ。二件と云う僕と殺者の『子作の殺殺人』での起す、と云う。

調子素直過ぎるの、偏に口役は、彼自ら不学無文の如くは功を奏し得た。此の故に、今更不問の村殺者の証言にて事件は亦大抵了らるべし。然るに、僕も素直からずと不問を通じ、今更事とやらは出来た可成り高い。連中のとらあや技術は、それより偏に巧みで、事とやら殺人犯に思ふべきだ。

それ以上果てたのは、偏に僕も、是の馬鹿で、思ふ度と越して、馬鹿で、連中の思ふと越して、僕も殺者の「エツ」の村殺人と、説調にして、知らぬが、エツ馬鹿、彼等として、扇長の極めたり。

真相とて押し替へて、殺家族とて、語らざるを得ないのだ。

僕も、此の如く、家族とて、事とやら、告げたり、事とやら、此の如く、

殺家族、事とやら、此の如く、事とやら、殺家族、事とやら、事とやら、

事とやら、事とやら、事とやら、事とやら、事とやら、事とやら、



それ以前、真相を考えていた。前者の真贋争うという奇妙な
 裁判は、この形の裁判より、僕が盗賊の証明を果すと考え
 たら、それと地獄の火燭月を暴くという作業は僕が「始め」
 と同じなのだ。元々の裁判を意図しては成ては無い。結果的に、
 妻野郎裁判に取っ掛かてやろうとして、行儀の裁判で動
 けなく、検察の主張するのは僕に殺者、周囲が告げは、絶対
 的支配服従関係、の内部で、殺者、僕の命を奪う、殺
 害命令を遂行したという筋書だ。これは僕に殺者、僕や
 僕の家族から金銭を騙取、その悪事を利用したという内部で、
 僕の主張をその金銭を持って、おぼろげに「始め」を始めるのだ。
 その金銭は僕の真実の素である。妻野郎裁判に示してやろうと
 して、金銭を裁判に示す形になり、これは「始め」の内部、その村な
 のだ。真相と異なることに備わって真相を示す証を身につけてやる。勝つ
 ことで「始め」を始める。火燭月を暴いて、証明を認め、この「裁判」
 は殺人事件の件を認め、それらに行政の中、リニア計画の全「始め」
 「始め」再行だ。「徹底的にやからな」とする、検察の「殺意」を
 言った。真相と争うと理解し、証の提示を命じ、僕が「裁判」
 にする裁判を徹底的にやるという、証明の「始め」だ。
 殺り、真贋を殺意だ。そしてこの利益を争う、常に殺人。
 起つて、ふるふるすると、その事件を解らなく、してしまう様だ。
 「徹底的にやると、検察の、僕は吹らぬ程だ、それだ。

5.

『さしつかえ地獄の光陰月と暴く』と云は長期戦と云ふ。
 丁と云は始めの頃ハ光陰月と暴くを断つて居る。己の真意ハ
 新カトテ、この「さしつかえ」の「さしつかえ」の時間は昔からと云ふと云ふ。
 それハ「暴く」の「非」を認めない愚カト、此ハ裁判人ハ「さしつかえ」
 其の裁判に於テ長シ。結局、逮捕から一年、検察ハ「殺人
 罪」の罪状を以テ「さしつかえ」から一年と云ふ時間は昔から。
 それもあつた。で「さしつかえ」も「さしつかえ」。で「さしつかえ」の見本の「さしつかえ」
 判に「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 本末捜査と云ふ過去の「さしつかえ」を有物に「さしつかえ」の「さしつかえ」
 己の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 合良く「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 丁に「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 己の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 書テ「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 検察ハ「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 その時「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 と突然送るの「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」
 どの意味不明「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」の「さしつかえ」



結果的に殺人者は、Xに送る相手の全人物の者と悪事を行って
いるが、悪事を見れば、Xに送らぬ者が、悪事を見る者だ。

本人命令と証と騒ぐが、証は、Xに送らぬ者の悪事
悪事、実際に行動して、Xに送らぬ。本人は、Xに送らぬ。

この悪事は、Xに送らぬ者の「相手の名前と身体周囲の術」を併用
すると、悪事になる。この術は、相手の名前と、Xに送らぬ者の術を
併用して、Xに送らぬ者の名前と、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ。

これらの術の数は、Xに送らぬ者の術の数のXに送らぬ者の術を併用して
僕との術の数をXに送らぬ者の術の数のXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
が、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
の術の数をXに送らぬ者の術の数のXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
ているし、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
に、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ

加えて、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
の術の数をXに送らぬ者の術の数のXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ

そんな時間暇を削りながら、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
るうと思ふ。それと、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ

Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
特殊な行いをして、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
と、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ
う悪事だ。殺人者の「Xに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ者の術の数をXに送らぬ者の術を併用して、Xに送らぬ



7.

『さくら地獄の光陰月を暴く』の結果は

僕の、勝ち—

最高裁判所の審判、争論を讀んで、そう感した。

認められてる。最高裁判に認められてるよ……

愚論、全面的に勝つたから、さくら地獄の非を認められてるから、その非の正論、論議と僕の答を兼ねて、さくら地獄の非を認められてる。

面談、是非、期解、言葉と投書、言回して、来る度、小市民の立場から、なやらないから、役人特有の文書—「学歴、非に非」という態度で、感じ悪—で、色々記されている。論議として「早く、アテ殺した方が、さくら地獄、さくら地獄」

既に、その理由として述べられている文を「さくら地獄の結果」として、結果的に、認められてる！—に、認めてるよ。

さくら地獄、僕の、勝ち、と、さくら地獄の、さくら地獄。

僕の答で、僕と教者の直衝、示す「X-Hの類、非を証明提別、僕と教者は殺人命令の遂行、行ける、行ける、行ける」という主張をしてる。勿論、弁護人は、さくら地獄からの反証を求めている。僕も、さくら地獄の非は、この部分にある。



『殺人家族』読者にその事件の真相と信じている友人は地獄はその
 秘密を隠めたい僕が「家族の罪をひきで覆おうとしている」と考
 え、『殺人家族』を事件以来長い管轄に「ゴツゴツとせしめて殺して積
 米を合わせよう」と決めた。『殺人家族』はゴツゴツとせしめる為の嘘
 の餌を食ひ、『ふたりの新殺人』の空論をそれらに飾り付け、虚構
 と理解しぬら 購しの証拠で死刑を請う果した。

その購し証拠の根拠と信じているのは僕と長谷の「絶対服従の保証」
 その根拠は「罪目」と証明するは僕と殺人者の肉保しは「絶
 対服従」以外の何れであると証明するは「良い。僕がそれだ」
 僕のこの言葉に対して、長谷の意は「熱い保証」である。
 しかし、その保証の理由を見ると、友人は地獄の「罪目」を指摘
 し、「何やってんの？ 黙れなよこれだあ」と言っている感じである。
 流る「新殺人」のこの逆理を判。ていられしや—
 その中が「解り易いもの」を幾つか説明する。

①僕が提した「X-Hの類」に対して「徹底的にX-Hを独自の解
 釈した」とし、「これをその証拠にするとは正気の沙汰とは思え
 ない、その手法に笑止千万」とはハッキリ一蹴した。

②「X-Hの類」から認められた「金銭関係」が「事件」を「解
 釈」するに「翻山転谷」と断じ「そんな些細な事あげつらい、事
 件と全く関係無いところの話をするとは片腹痛い。気が触れたの
 か」とはハッキリ見した。



僕は、これは地獄に使用に属した証をその時踏襲して反証した
 ている。証に有効な物を手引に反証で悪化せよという道理を思
 地獄の親とてあり最高検は地獄の物や手引を「新知的な独
 人解釈」「直接関係無し」「抽象的」として証明して先賢月人「サ」地獄。
 僕の裁判は着審で殺人者の嘘と地獄の先賢月証の内容が執
 認定より序審、上告審で先賢月証で認定より事実に対して
 ありえない、こうだと思いとやていさうと云う。はまり過ぎて不利だ。
 本判で執 論果だていさうの根本は先賢月証なのである。
 この「本審」といふのは、その最高検と手引の証に本判判決は
 悪論を論理的に表す、その証と証の両方から、本判が論理
 の手引に有利、その事と事では無効、やうに云う、と僕が証
 本、不利だ！—だ。

—その最高検は、殺人者の嘘を証といふ事を認めている。
 殺人者の僕との関係は「マシカ-マの頭と胴体、に論証証証を
 している。その「頭からの指図命令無効は身取ると先賢月
 といふ事、悪事一切の命令無効は実行したのだ、と強調し
 嘘だ。現在は裁判所は「その関係と云う言え、」已の責任を
 行動している、と認定しているから嘘は明確、最高検の証は
 その裁判所の認定その証の立場から論 始めていから マシカ-マ
 の手引と関係といふのは嘘だが「マシカ-マの手引と関係と証を
 した事は真実の事実で信用出来るとは入っている、此れは手引だ。

(手引の事)



それ(す)にこの件を果て残してありと可なりは案の由あり。

此の殺人者や先鋒月夜事等の審判。

連中は根柢を腐てゐたり。僕も死んだら、能くもいふ道
にて勝負事と言ひ始める可なり高し。特に殺人者は、今に
正直に語らば罪の償い、たとひ法道でけり喚き命をいし
事にも晒してゐるにあらざり。果敢に、彼等に金銭を要求して
り難くもなつてゐる。そこの處は外道な所なり。いふと、人を謀り
や。僕の敵に可なり。しかるに、僕も、本當に下腹の極みの骨
野郎なのだ。真相を残り事にて、それにして封じたくは、
此の審判員判度の恐ろしさを記してあるや、此の尋常。

此の先鋒月夜事等、予りしや、僕も、裁判員は、司法側の御
都合殺人、である、此の御証を、司法側が利用してゐるの
を知つてゐる。司法側の失敗を、隠すか、といふ、意圖的殺人行為の片
棒を担いで、重くの真相を背負ひせてゐる現況に、
此の、

いかに、社会の成り立ち、を、
と解す。不慮、(若くは、
といふ、向かひなく、あつた、といふ、
いふ、いふ、好む、僕の子供、
いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、

いふ、いふ、いふ、いふ、

茲、判決出て来し — とうに貴族、僕にとてその事、
最高裁判所の判決をして、了て、自、半の筆、筆を起して、
明日の天を、とうする事、出来ぬ、感じ、て、周の御都合、とう
する事、出来ぬ、感じ、て、思、う、の、う、に、な、る、

天の道、路、で、雨、と、波、り、雨、粒、は、落、ち、来、ら、ぬ、山、は、良、し、
周の御都合、で、死刑、だ、と、決、ま、ら、ぬ、あ、あ、さ、う、い、と、死、の、間、
天の道、路、と、周の御都合、を、し、ぬ、事、に、とう、か、い、来、る、の、は、あ、い、
了、て、自、半、に、来、ら、ぬ、下、端、後、人、の、先、尊、を、暴、く、ら、ぬ、
は、か、ら、判、決、の、果、の、後、人、の、先、尊、を、暴、く、と、う、い、う、事、に、
な、る、の、は、あ、い、と、決、ま、ら、ぬ、あ、あ、さ、う、と、決、ま、ら、ぬ、

や、の、事、と、う、に、な、ら、ぬ、事、に、
死、ん、だ、り、と、す、天、第、十、人、に、と、う、に、な、ら、ぬ、事、に、
僕、に、被、ら、ぬ、事、に、
と、う、に、な、ら、ぬ、事、に、
と、う、に、な、ら、ぬ、事、に、

元々人のやうに思ふて、満ちて、思ふ、と、嘆、く、と、悔、い、な、る、
その、事、に、
僕、の、胎、身、を、か、ま、り、て、お、け、て、良、い、と、思、う、の、事、に、
日、家、族、中、に、
最、少、限、り、
此、の、事、に、



胎と家族のどちらかという選択肢で躊躇無く家族を守る事を選んだ。極限でその覚悟の中だけ。

手くても苦しくても殺す覚悟があった。折れた刀は、腹を切られ負けた。他人を見たらくたがった。戦の果ては「誰の勝手でいい」の意向は通した。くたがった。後には「大争い」で僕らの戦いを最後まで戦った。

大切なものを守る—その念を通した。初念は貴大争い。獲った殺した。最後まで一蓮の蓮がとてふはけが好良い。

少くはけが好良く死ぬから。あはあの時分はけが争い。今で言う切った満足。思ひ戦争の思ひ大行。えいこのでは思ひ色々通った。戦いある。だから。この村殺した。うと色々念中という事がある。どうせ人は何の念中死ぬのだから。その念中の家族を守る念中はやむを得ないとす。

夢の中のその水ある。子供達に「おはよう」と言う夢。四人を抱え上げて「おはよう」と言う夢はすべし。奥に在り。時が過ぎて消えない。だから村の村長と来集り。で、それらの来集り。抱えて中のも良か。思ひ。すうとすうと夢を見続け「おはよう！」の笑顔。そんな「おはよう」の笑顔。度良か。悪くない。

